

二階の一室に衣装室を見つけた。クローゼットを開けると、詰め込まれたドレスが見つかった。ダイヤモンドがちりばめられているドレスに目を付け、ダイヤモンドを無造作にむしりとり、布袋に入れる。クローゼットの隣には、帽子掛けがあった。棒の左右にいくつもの出っ張りがついていて、そこに様々な色や形の帽子がかけられている。真珠や孔雀の羽根をむしりとり、それも布袋に入れる。

鏡台の上には小物入れが置いてあり、中を開けると、細い鎖で繋がれたダイヤモンドの粒や宝石をはめ込んだペンダント、イヤリングが入っていた。蓋を閉めて、箱ごと布袋へ入れる。部屋の窓を開けて、そのまま飛び降りる。芝生の地面を転がり受け身を取ると、そのまま走り出した。

あたりは真つ暗で視界がよくないが、ブナと菩提樹の並木道に沿えば出られる。

半分ほど行った所で道を逸れて、木々に隠れながら出口を目指す。入ったときも門から入らず塀を飛び越えた。

「待て！」

塀を上ったあたりで、後ろから声が聞こえた。そのまま無視して塀を飛び降りる。布袋を抱えたまま走る。

しばらく走ったところで、思いがけない言葉を耳にした。

「エレマイア」

待てと言った男とは違う男の声だ。緑地が広がっていて、なだらかな斜面のある丘に出た。月光に照らされて、エレマイアの両耳の青いピアスが光った。エレマイアが立ち止まると、二人の足音も止まった。だから、振り返ることに決めた。

月光に照らされたエレマイアの姿は、風に吹かれて前開きのスカートがふわりと浮き上がり、開いている所から見えるよりもさらにペチコートが露わになる。ドレスが浮き上がる一方で、ペチコートは左右に重々しく揺れただけだった。豪華なドレスには似つかわしくないほど短く切られた髪だった。少年と見間違えるほど短い金色の髪が夜風に揺れる。両耳の青いピアスがまた光る。

「バルク、この子を知っているのか」

横に二、三段カールした白い髪を被った男が問うた。貴族らしい。ステッキを持ち、カフスが細くすつきりしたコートを羽織っている。

「ああ……」

名前を呼んだ男が、歯切れ悪く答える。エレマイアも彼を知っていた。

「バルク、教えてやれよ。私が粒獣（りゅうじゅう）だってことを。私を裁きたいのなら、殺すか、自治区に連れて行くことだな」

粒獣虐殺戦以後、停戦協定が結ばれ、粒獣のことは粒獣が作った法律で、かつしかるべき場所で裁かれることに決まった。人間の作った法律には縛られないということだ。

~~~~~中略~~~~~

真冬だというのに、暖炉には火どころか石炭さえ置かれていなかった。その気になれば石炭はいくらでも調達できた。だが、エレマイアはそうしなかった。

虐殺戦のときに家は半分ほど壊された。停戦後、人を雇って修繕させたものの、素人大工ゆえに壁から隙間風が入ってくる。

家には家具がなかった。凶暴化した民間人に全て持って行かれたからだ。素人が修繕した壁以外に風をしのぐ物がなく、エレマイアを冷たくする。屋敷がより広く思えた。

一番、金を使っているのはドレスだった。ロンドンにある仕立屋で作ってもらっている。虐殺戦前の仕立屋に行く勇氣はなかった。戦後仕立屋はそれなりに繁盛していた。虐殺戦が終わるやいなや、国外逃亡した貴族の人間たちがわらわらと帰国してきたからだ。

店主は、エレマイアが粒獣だとわからなかったのだろう。初めての客なのに、やたらに愛想が良く、そして腕も良かった。人間は粒獣か人間かを見分けることはできないが、粒獣は見ただけで同族かどうかがわかる。

~~~~~中略~~~~~

出迎えるところには、バルクと金色のピアスを両耳につけた黒髪の男が立っていた。

「引き渡しに来たのか。公僕には見えないが」

粒獣が犯した罪は、粒獣たちが済む自治区で裁かれることになっている。

「このザカリー・サザランドのパトロンがお怒りでね」

ザカリーと名乗った男が言う。彼も貴族の格好をしていた。貴石をはめこんだステッキを持っている。上部ではなく少し下の棒の部分を掴んでいる。あの時つけていた白髪の鬘がない。かわりにキャップを被っていた。

「今日は鬘をしていないのね」

「あれは、かしまった場でしかつけない物だからな」

「貴様のパトロンの御機嫌取りに付き合うつもりはない」

「粒獣が住む自治区なんだ。裁かれるといつたって形式だけだと思うし、ここにいるよりも悪いことにはならないと思う」

自治区の存在は知っていた。そして、ザカリーの言っていることは正しい。自治区の生活は良いと噂で聞いている。

バルクが前に出てエレマイアを見据えた。バルクは鬘もキャップもしていなかった。エレマイアと同じ金髪だ。剣は持っておらず、手袋をしていた。マントではなく、寒さをしのぐためのオーバーコートを羽織っていた。

「直接話したことはなかったな、エレマイア。戦前、君の両親と仲良くさせてもらっていたよ」

「知っている。そして、仲良くしていた両親を、貴様が殺したことも」

そういうと、バルクは驚いたように目を見開いた。

「なぜ、知っている……」

「見ていたから。英雄様のわりに探索がザルよね」

~~~~~中略~~~~~

「エレマイア」

バルクが自分の名前を呼んだ。エレマイアは玄関から離れ、テーブルの上のナイフを手にとった。

「脅す気か？」

ザカリーが言い、バルクが慌てた様子で近付いてきたときには遅かった。

他害するなら素手の方が強い。自傷するなら武器を使うしかない。エレマイアはナイフを左耳に突き立てた。手首が隠れるほどのラッフルに血がつく。袖の薄いモスリン生地はいつも簡単に血を吸収する。

すぐにナイフを抜いて、左耳を切り落とす。あふれ出した血がドレスを汚す。淡い緑のドレスに、銀の糸で刺繍された大きな花が真っ赤な血で染まった。

続けざまにためらいもなく左目の眼球にナイフを突き刺した。目の奥にナイフを引っかけ、そのまま眼球ごとナイフをひっこ抜く。

自分の眼球を無関心にナイフから引き抜き、床に落とした。

綾織りの淡い藤色の靴に血が飛び散った。

「あなたたちが帰らないなら、残りの耳も目もこうするわ」

「早く病院に行かないと」

ザカリーが近付こうとするのを、バルクが腕を掴んで引き留めた。

「今日は帰ろう」

「でも、エレマイアが」

「ここに残る方が、悪化する」

ザカリーは何度も振り返りながら、バルクは振り返りもせず屋敷を出て行った。

~~~~~中略~~~~~

片目片耳の日々に慣れた頃、再び二人と思しき輩が扉を叩いた。

無視をしていると、鍵のかかかっていない扉を開けて二人は入ってきた。

ザカリーはエレマイアの顔を見てぎよっとした。それもそうだろう。血で染みだした布を左耳と左目を覆うようにして巻いているのだから。

止血はしないともつと面倒なことになる。このくらいで留めておかないと。

「来たら残っている方も同じようにすると言ったでしょう」

「エレマイア。君にはできない。今の君と同じだから。半分だけの音。半分だけの世界。全部の音を聞こえなくするのも、見えなくするのも怖いのだろう。でも全部は見たくないし聞きたくもない」

バルクが言う。

「挑発しているの？ 的外れね。全部も半分も変わらない。見えるのも、聞こえるのも嫌いよ」

~~~~~中略~~~~~

汚した方のナイフで同じように右耳を削ぎ、右の眼球を取り出した。何も聞こえない、何も見えない。痛みが変わらないなら、音がない方が良くし真っ暗な方がいい。

カフスは手首よりもやや手前まで伸びている。端を波の形に切った扇の形のフリルに血が滴る。フリルは層になっていて、血は上手に一枚目も二枚目も汚した。

「どうするんだよ。もう彼女には何も伝えられないじゃないか」

ザカリーが叫ぶ。その間にも空洞の耳と目からは血が流れている。綺麗な曲線を描きながら小さな花々を咲かせている銀色と黄色系の蔓を汚す。

「何も見たくないし、何も聞きたくないから、こんな所に住んでいるんだろう。だが、それで生活できるとは思えない。すぐに次のアクションを起こすさ。ひとまず帰ろう」

バルクが踵を返した。

「わかっていて挑発したのか。お前、仮にも虐殺戦の英雄だろ。全ての粒獣に恨まれても殺されても文句言えない立場だろ。加害者がこれ以上被害者を責めてどういうつもりだよ」

ザカリーがバルクに食い下がりがりながら、エレマイアの屋敷を後にした。

何も見えない、何も聞こえないエレマイアは、何が起こっているのかわからず、しばらくその場に突っ立ったままだった。

頭が揺れ、貧血を起こしはじめたことに気付いてから、やっとエレマイアは動いた。手探りで削いだ耳からピアスを回収した。

~~~~~中略~~~~~

村人は全員そのことを知っている。虐殺に関与したイギリスの人間は全員。王家が強鼓のことを触れ回ったから、どれだけ痛めつけてもいいと虐殺にさらに火が着いた。執拗に何度も同じ粒獣を殺そうとする人間も多かったと聞く。

給水される水は不衛生だ。犬や猫の死骸の断片が入っているのはもちろん、砂利や草木のか

けら、くみ取り人を頼んでいない人が適当に外に捨てた排泄物が混ざることもある。給水管が脆いからだ。不純物が入り込みやすい。

近郊でこうなのだから、ロンドンをもっと汚染された場所なのだろう。そんなことを考えながら、庭に出て清潔な井戸水を汲んでいると、足音がした。

ザカリーとバルクだ。

ザカリーは目を見開いて、一瞬間抜けに口を開いて閉ざして、再び開いた。

「どうしたんだ？」

「貴様らの方がどうしたんだ？ 貴族は暇なものだけど、無駄な時間を潰す娯楽くらいもっと他にあるだろう。粒獣に粘着するよりもっと有意義な」

「

~~~~中略~~~~

「わかった。準備するから待ってろ」

だから、エレマイアは屋敷から出ることに決めた。青いピアスが光った。

「じゃあ、待っている」

ザカリーが言った。エレマイアが屋敷の中に入り、扉が閉まる音がする。振り返ると二人の中には入ってこなかった。真冬の中、貴族の庭で貴族の女の子を待つ成人した二人の男性貴族。わきまえている人間たちだ。

貸し馬車でユーストン駅まで来た。駅は人でごった返している。三人は人に揉まれることなく凜々しく立っている。バルクも貴族だ。貴族が三人並んでいて、上等な服を身につけている。こんなに大勢の人がいても、この三人より上等な衣服の人間を見つけるのは困難だろう。

エレマイアは、厚手の柄織りの絹のドレスに不釣り合いな、大きいトランクを持っている。家具に使うような明るい茶色のトランクだ。ドレスは焦げ茶色で光沢があった。刺繍には色とりどりの糸が使われている。手袋も革靴も焦げ茶色で揃えている。帽子だけが白い。

列車がホームに入ってきた。すると、手からトランクが離れた。バルクが持つてくれるらしい。空いた手に人間の手が重なる。

「人が多いな」

見上げると、ザカリーが笑って手を引いた。手袋越しでも触れるのは怖い。エレマイアはそれを悟られないように、今すぐにでも振りほどくか手首ごと引きちぎって捨てたいのを必死で我慢した。青いピアスが光る。

列車の中は満員だった。席を確保して、三人で座る。トランクはバルクが上の荷台に載せた。粒獣のエレマイアにとっては軽いのだが、二人は貴族なので紳士的な振る舞いをさせてやることにした。

座席に座るとザカリーの手が離れた。向かいにはバルクが座っている。

満員列車の中で声を上げて泣くわけにもいかないし、なんで泣いているのかも説明できないし、するつもりもない。

エレマイアは、声を押し殺して涙を流した。

人の手が怖い。最初は、簡単に人の指を折れる粒獣の手をおもむろに取る、そんな警戒心のなさに驚いたけれど、それ以上に、エレマイアの指を折るほどの力もない手が、恐ろしく怖いのだと、人に触れられるのが恐ろしいのだと、思いだした。

トランクを持ってきている優しさを素直に受け取れない自分が悲しい。

頭に沿う帽子は小さく薄く、顔を隠すのに役に立たない。トランクは荷台の上。髪も短い。手で顔を覆ったら、泣いているのなんてすぐにばれる。

向かいに座るバルクは、大粒の涙をこぼしているエレマイアに気付いたようだった。驚いた顔をしたバルクは一度口を開きかけたが、結局何も言わずに、窓の方に顔を背けた。バルクは、再会してから驚いた顔ばかりする。

~~~~~中略~~~~~

柵も石垣もない。果樹も花もない。ただの芝生に囲まれた邸宅だった。パラディオ様式の館で、白い石壁で出来ている。建物の下部分はラステイクーション加工をほどこした石造りで、二階の部分に縦長の四角い窓が並んでいる。窓枠の支柱は垂直方向にも水平方向にも入っている。中央には飾り柱で支えているポーチコが張り出している。くすんだ青色の屋根の角度は浅く、煙突の背も低い。三階は外から見ても、二階の面を強調するように低く小さく作られているのがわかった。

厩舎と物置らしき小屋が邸宅から少し離れた所にぼつんと建っている。

「別邸？」

「実家ではないな」

エレマイアがふっと息を吐く。青いピアスが光る。虐殺戦前、バルクの実家は知っていた。パーティに招待されたことがあるから。

「英雄様へのご褒美ってわけね」

バルクは答えなかった。それは肯定を意味していた。

粒獣を虐殺して褒美をもらえる人間がいる。一方で王家は粒獣への虐殺を認め、様々な補償や賠償を約束した。国に忠義を尽くした人間への褒美は与えるが、未だに粒獣を弾圧する人間に対しては肅正する。全て王家の言う通りに。何の矛盾もない。

使用人の一人が出迎えた。

「お帰りなさいませ。バルク様。ザカリー様。おや、そちらのお嬢さまは」

エレマイアは、スカートの裾をつまみ、膝を軽く屈折させてお辞儀をした。

「エレマイアだよ。俺たちの客人。エレマイアは二階を使いなよ。真ん中以外は空いているから」

ザカリーは家主のような言い方をした。

「実家は？」

「ロンドン」

場所を聞いたわけではないのだが、バルクはそう答えた。

「独身よね？　いつでも嫁を娶れる立派な家ね」

英雄が結婚したなら、後釜に据えられた王家といえども無視はできないだろう。パレードを開くはずだ。それが無い、エレマイアが知らないという事は独身だろう。

この邸宅もそうだ。褒美だって、既にハノーヴァー家は四人の弟と四人の姉妹と彼らに近い親戚、人物も含めて全員粒獣の英雄と彼ら側の関係者に処刑されている。

この邸宅は今の王家から報酬してもらったものだ。どこからそんな人手と資材と金が沸いてでてくるのやら。もともとあった邸宅を改築したのかもしれないし、空き家だったのかもしれない。しかし、人がいた可能性もある。だとしたら元の家主を追い出したのか虐殺戦で死んだのか。王家主導で。粒獣虐殺戦の英雄バルクの住処を確保しなさいという王家の命令で。

バルクは黙ったままだった。使用人が気を利かせたのか声をかけられた。

「エレマイア様。こちらへ」

と促されるように強制的に二階に案内された。

いくつものある部屋の内の一つに案内された。

執事がトランクをドアのそばに置いて出ていった。天蓋付きのベッド、筆筒、テーブル、書き物机、ドレッサー、一通り揃っている。昔のエレマイアの家もそうだった。

エレマイアはトランクを持ち上げ、ソファに座った。トランクを開ける。中はまだ服になっていない生地とドレスや手袋や帽子などの服飾品とお金を入れた布袋が入っていた。

クリーム色の絹の足首ほどの丈のある寝間着を引っ張り出した。

寝間着に着替えたあと、薄くて半分透けている絹でできたベッド用のカーテンを開けた。銀でできている柱は四本立っている。柱の足先は銅か真鍮だろう。丈夫さを確かめた後で、寝床についた。柔らかいマットレスに温かい毛布がエレマイアを包んだ。

窓から射し込む日差しで朝が来たことを察したエレマイアは、ベッドから降りた。点状からぶら下がっている紐を引いて使用人を呼ぶ。

エレマイアは身だしなみを整えた。井戸水は下女がボウルに汲んでこさせたものだ。一通り身だしなみを整え終わった頃に、部屋の隅に佇んでいた下女が切り出す。

「髪をとかしましようか」

エレマイアは、首を横に振って遠慮した。ドレッサーの鏡に映る、自分で切ったこの短い髪

をどういじるといふのか。エレマイアは下女を下がらせ、自分で櫛を通した。

純白のドレスに着替える。一人暮らしを始めてから、一人でドレスを着ることに慣れてしまった。

昨日着ていた服とザカリーから借りたハンカチを渡す。

「洗っておいてちょうだい」

「承知しました」

下女が下がったところで、ドアをノックする音がした。ドアを開けると、タイミング良くザカリーが呼びに来た。

「飯だよ」

食事用のテーブルには既にバルクが席についていた。エレマイアとザカリーが座ると、二人の食事も運ばれてきた。

「暑いのね」

パチパチと耳障りな音のする方へ目を向けると、食堂を暑くする暖炉の火が赤々と燃えている。青いピアスが光る。

「暖炉の火を消してくれ」

バルクはエレマイアの方も、使用人の方も見ずに指示を出した。下男が特に感情を表に出すことなく黙って指示にしたがった。使用人たちが連携する。水を汲んだ桶に火かき棒をつっこみ、濡れた火かき棒で火で薪を引き寄せ、燃えさし挟みで一本一本まだ火がついている薪を取り出し、水の入った桶に突っ込み暖炉の火を消した。

燭台にある蝋燭の火はついていない。窓からは日光が射し込んでいるからだろう。

「いただきます」

三人が口をそろえて言い食事が始まった。ポタージュを銀の匙で掬って口に入れるエレマイアを見て、ザカリーが微笑む。食べる前から見られていることには気付いていた。

「何笑っているのか知らないけど、毒が入っていたって食べるわ。こんなにおいしかったら、毒で死んだって良い。最も、粒獣が死ぬ量の毒が入っていたらさすがに気付くと思うけど」

そして致死量の毒が入っていたら、強鼓する。一瞬で絶命させない限り粒獣は復活する。久しぶりに温かい物を食べた。真冬かつ戦後それほど経ってもいないのにどこにそんな備蓄をしていたのかと不思議に思うほど、ミルクがふんだんに使われたポタージュだった。つぶしたジャガイモに塩漬けにした肉が入ってザカリーもついてきた。黒パンでもポタージュと食べれば柔らかくなる。

昔、実家で食べたスープを思い出せないくらいに温かくておいしい。

「おいしいなら良かったな。たくさん食べな。エレマイア」

毒の話をおっさりスルーした。ザカリーは穏便な空気にしたがる傾向があるようだ。その金色のピアスが光る微笑みの裏には、気苦労が絶えなさそうに見えるのは気のせいか。

「昨日から家主面をするが、貴様は何なんだ」

「ザカリー・サザランド。養護院を作るために資金集めをしている。バルクは初めてのバトロ
ン。支援者」

~~~~~中略~~~~~

ザカリーにそう言われたものの、エレマイアの前に置いてある皿は既に空だった。

「おかわりはいかがですか？」

使用人が声をかけてくる。

「平気。ごちそうさま」

「馭者と下女が買い物に行っているから、馬が帰ってくるまで待機だ」

バルクがそう言って食堂から出て行った。

ちょうど下女が空になった皿を下げるのを見届けてから、エレマイアは客室に戻った。ザカ  
リーも部屋に戻ったようだ。

部屋でトランクの中の紙幣や硬貨を取り出した。屋敷で盗んだ金銀財宝を換金して手に入れ  
た金の残りだ。トランクの中から服ではなく生地を探して引っ張り出す。ドレスに仕立てるた  
め買った生地だが、今はこれしかないもので、少しばかりもったいない気もしたが、すぐに思  
い直して、使うことにした。ハサミで生地を半分に分け、その厚みのあるしつかりした生  
地で紙幣と硬貨を包んで、残りの生地で二重に包んで硬く結んだ。

外に出て、屋敷の裏手に回った。土の軟らかいところを探し出して、近くにあったスコップ  
で土を掘った。ある程度の深さになったところで金が入った包みを入れて土をかぶせて蓋をし  
た。

体験版はここまで